

えほんたいこうき

## 絵本太功記

〔解 説〕寛政十一年（一七九九）大坂豊竹座初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作による全十三段の時代物です。豊臣秀吉の出世物語であるいくつかの「太閤記」を下敷きに、明智光秀が主君織田信長を討った本能寺の変から、光秀が秀吉に討たれるまでの十三日を十三段にあてはめて描いています。中でも十段目「尼ヶ崎の段」は俗に「太十（たいじゅう）」と呼ばれこの作品を代表する名場面となっています。登場人物の名称は仮名手本忠臣蔵同様、幕府の検閲から逃れるために変えて書かれています。

〔あらすじ〕主君尾田春長の横暴な振る舞いを諫めたことにより、領地没収となった武智光秀は、本能寺に夜襲をかけ春永を討ちます。備中高松城を攻めていた春長家臣真柴久吉は取って帰して光秀討伐となります。光秀の母さつきは、主君を討った光秀を許さず、一人尼ヶ崎に転居するのですが、そこへ光秀の妻操と息子十次郎の許婚初菊が訪ねてきます。そこへ旅の僧に身をやつた久吉が一夜の宿を乞うのでした。出陣の挨拶に訪れた十次郎は初菊と祝言をあげ戦場へ向かいます。すると最前から様子をうかがっていた光秀が現れ、旅の僧を久吉と見破り襖越しに刺しますが、そこにいたのは母さつきでした。十次郎は敗戦の様子を伝えて息を引き取り、光秀と久吉は他日の決戦を誓って別れるのでした。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

## 夕顔棚の段

老母はつどつど門送り、庭の千草に打つ水も、保つ葉ごとくに風薫る軒を目当てに来る人は、武智が閨に咲く花の、操の前は家来を遠ざけ、嫁の初菊伴うて、窺う切戸の庭先に、花に心を養う老女。それと見るより手をつかえ、

「後室様の見舞いとして、只今参上致せし」と懇懃に相述ぶる。詞に老女は打ち笑み、

「ヲ、珍らしい嫁女、孫嫁。遙々の道ようこそようこそ。

さりながら倅光秀、当月二日本能寺にて主君を害せし無法者。同じ館に膝並ぶるも先祖の恥辱身の穢れと、館を捨ててこの在所へ身退きしこの婆を見舞いとはおこがましい。善にもせよ悪にもせよ、夫につくが女の道。操の前は武智十兵衛光秀が妻。そなたはまた孫の十次郎光義が嫁でないか。生死分らぬ戦場へ赴く夫を打ち捨てて、浮世を捨てた姑に孝行尽すは道が違う。妻城にとどまっ

て留守を守るが肝要ぞや。もうやもめ暮らしの楽しみに夕顔棚の下涼み。捨つべきものは弓矢ぞ」

と、言ひ放したる老女の一徹。後は詞もなかりけり。常の氣質と逆らわず、

「いかさま、後室様の仰るとおり、この様にただお一人ござつたら、何もかも気散しで、マア第一はお身の養生。今から私も初菊も後室様のお傍にいて、飯も焚いたり茶も沸かし、お宮仕えをしようぞいの」

と、あり合う前垂打掛の上に引き締め茶釜の傍、花香の籠もる姑の渋々機嫌を取兼ねる。娘心に初菊も

「マどう済むことか」

濁り井の深き奇縁の釣瓶縄、『水汲み上げん』と立寄れば、

「コレコレ嫁たち。シテ孫十次郎は城に残つていめさるか」

「さればでござります。十次郎が願ひには、『どうぞ今日の軍に高名手柄が現わしたいと、父上までは願ひしかど、

婆様のお赦しなきに出陣するも本意でなし。母に取次ぎしてくれ』と、くれぐれの願いゆえ。あまり健気さ、祖母様に御機嫌の程いかがぞと、伺いに参りました」

と語るうち、老母は涙をはらはらと流し、

「ヲ、うるさの嫁が物語り。主を討つたる逆賊の邪非道の軍の評定聞くが厭さのこの住まい。ガまた孫を誉めるではなけれども、非道な倅光秀が子に、十次郎という武士が生れて来るとはこれも因縁。悔んで返らず。戦場のこと聞きとうない。アイいやや情けなの浮世や」と、無量の思い百人の数珠爪繰っていたりけり。

折ふし表へ草鞋がけ、風呂敷背にいつきせき、蛙飛込む道野辺の清水結ばん夏の旅。西行もどきの僧一人、門口に立休らい、

「諸国修行の一人旅。近頃申し兼ねたれど、お宿の報酬に預りたし。押しつけながら」

と言い入る。声を老母が聞き取って、

「見苦しゅうござりますれど、お心置きのう御一宿」

「それは千万忝ない。さようならば御遠慮なしに、御免々々」

とあがり口、腰打ちかくれば、二人の女草鞋の紐を解きかかれば、

「ア、勿体ない勿体ない、構うて下さりますな。旅しつめた妨主の気散じ、木納屋の隅でもついころり。蚊帳も蒲団も入りませぬ。お心遣い御無用」

と、詞なかばへ表口、人目を忍びただ一騎、窺い立ち聞く武智光秀。『心得がたき旅僧』と、生垣押し分け差し覗き、思わず見合わす母の顔。老母は何か心にうなづき、

「ヲ、わしとしたことが心のつかぬ。コレ御出家様、この板囲いがすなわち風呂場。水は幸い汲んでありつばやぼやと燃やして、暑い時分じや、行水して休んで下さりませ。婆も後で相伴しましょう」

「ア、イヤ、それには及びませねど、相伴とあれば沸か

しましよ。そんなら御免なされませ」

と、包み引下げ気散じに湯殿をさして入りにける。

味方の軍卒両手をつき、

「御息十次郎光義様。『後室様に御願いの筋あり』と、  
只今これへ御越し」

と言ふ間ほどなくしずしずと、家来に持たせし鎧櫃早き  
入れさせて打ち通り、

「コリヤコリヤ者ども、そちたちに用事はない。陣所へ  
早く」

と追つ立てやり、威儀を正して両手をつき、

「母様を以て御願ひ申せし出陣、御聞き届け下されなば  
武士の本意」

と十次郎、思ひ込んでぞ願ひける。老母は見るより機嫌  
顔。

「才、珍しい十次郎、出陣の願いと。倅を見限りこの  
所へ身退きしに丁寧な願いの筋。最前嫁女に詳しゅう聞

きました。とても出陣しやるなら、祖母が願ひはこの初  
菊。今宵この家で祝言の盃してから門出しや。なんと嫁  
女嬉しいか」

と、老いの詞に初菊は、飛立つばかり気もいそいそ。心  
の悦び穂に出づる、顔は上気の夏楓、色も媚くばかりな  
り。ただ黙然と十次郎、『今日初陣に討死と覚悟極めしこ  
の体。お暇乞いに参りしと、知らせ給はぬ悲しや』と、  
涙呑込む忍び泣き。操の前も立ち上がり、

「祖母様の御機嫌の変らぬうちに固めの盃」

「ヲ、それ、孫も大方心せき。操は九献の用意しや。十  
次郎が初陣の鎧の役はすぐに花嫁」

三国一の悲しみと知らぬ白歯の孫嫁が手を引き連れて三  
人は奥の

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください。